

# 新たな日常と社会福祉

## —「つながり」の未来を見据えて—

コーディネーター 畠中宗一 [関西福祉科学大学]

### 1 テーマ設定の意図

新たな日常という表現は、コロナ禍がこれまでの日常を変化させてきているという意味と、さらには人間や経済の諸活動が地球環境に負荷をかけているという意味での「人新世」という視点から見た、気候変動に象徴される生態系としての地球環境のミクロ水準からマクロ水準の機能循環が維持できなくなってきたことを背景にした二重の意味で解釈することができます。二酸化炭素の排出による地球環境の変化は、氷のなかに封じ込められていた未知のウィルスの顕在化や気候変動に伴った自然災害の多発化を引き起こしています。新たな日常を、コロナ禍を背景にするのか、さらには「人新世」の文脈で展開するのかによっても未来の描き方は異なってきます。

われわれの思考は、理念を志向しながら、現実の対応のなかで理念に逆行する選択をすることもあります。今回のロシアによるウクライナへの侵攻は、地球社会における経済活動に大きな影響をもたらし、ドイツでは、原発を容認する方向に変化してきています。経済活動のひっ迫が、理念を遠ざける結果をもたらしています。

経済活動を優先させてきた結果、生態系としての地球環境に負荷がかかり、その循環が機能不全を起こしています。その結果としての自然災害の多発化であり、コロナ禍の発生です。「人新世」に依拠すれば、経済活動を抑制しなければ、更なる負荷が地球環境にかかり、生態系としての地球環境が機能不全に陥ることになります。新たな日常は、このような認識を背景に議論されるべきではないでしょうか。

また「つながり」という用語は、社会変動のなかで希薄化や分断化を促進してきましたが、今回のコロナ禍が、希薄化や分断化をさらに助長してきています。加えて、気候変動による食料不作が、格差を広げ、不公正な社会を助長しています。社会変動や気候変動が、人々の分断化を促進し、格差を拡大しています。

われわれは、新たな日常をどの水準から議論していくのか。また新たな日常の中で、「つながり」をどのように再構築していくのか。3.11で原発事故が起こり、世論は反原発にシフトしかけたことが、時間の経過の中でまた経済優先の発想に戻ってきています。われわれは、経済優先の発想から抜け出さない限り、生態系としての地球環境を維持することは難しいと想像します。新たな日常は、どの水準で問いを発するかで異なった未来を描くこととなります。「つながり」という用語は、弱い立場に置かれている人々を勇気づけ、ひいては地域社会を再生する原動力にもなりえます。

本シンポジウムでは、コロナ禍が日常化するなかで、加えて人新世という文脈で「つながり」の未来を展望しながら、ポストコロナにおける社会福祉の方向性を探索することを目指したいと思います。

### 2 展開の流れ

本シンポジウムは、全体で3時間半が用意されています。最初に20分の発題を行って戴きます。発題の後、簡単な質問を受け付けます。4名の発題終了後、休憩を取ります。この間、質問のある方は、配布された用紙に質問を書いて戴きます。休憩終了後、主要な質問に応じて戴きます。その後、残された時間で、主要課題をテーマに討論を行いたいと思います。